

利賀村の老人たち

富山県農村医学研究会 越山健二

利賀村の老人たちは、みんな明るく呑気で楽しい老後を送っているという話から、どんな暮らしがあるのか昭和58年秋、福野保健所の利賀村健診に参加させてもらった。私共は昭和44年秋にも利賀村の健診を行った事があるが、既に15年の歳月が流れ、大きな変貌をどけているように思われた。

今日の利賀村は、アマチュア国際演劇の舞台となり、毎年夏には、世界の演劇人が集り有名になっている。観光客も多く、民宿を営む世帯も多いようだ。従来から京都の西陣織物も行われており、近年はまた甘茶が生産され、キャベツ巻の加工も行われたり、過疎化防止や高齢者の生き甲斐対策として、種々の施策が試みられている。

健診の行われたのは「道場」であった。

ここは、真宗の布教場とでもいうのか、村人が集り、経を読み、説教を聴聞する場所で、仏壇があり、信仰の厚い道場坊によって、管理されているようだ。種々の会合や娯楽の場にもなり、広く村人の交流の場所でもある。

村に入って先ず目につくのは、どこの家でも色彩豊かな草花が栽培されていることであった。緑の森林が家の近くまでせまり、色の対比が特に印象が深かった。これらの花は、神仏に供えるためもあり、降雪期を除き、四季折々欠かさない配慮がなされていて、このことは、又こまめに動き廻り老化防止にも役だっていると思われた。

私共は、道場で数十名の老人たちと面接し、その暮し向きや、個人個人の想いを伺うことが出来た。

みなさんは、大変明るく、屈託がない。言

葉や行動に張^{はり}があり、清潔で、礼儀正しい印象を受けた。豪雪のきびしい環境の中で生れ育ち、女子は15、6才位で京都の西陣や、紡績工として、滋賀県や名古屋方面へ嫁に出かけ、数年以上も郷里を離れて暮し、男子もまた、ほとんどの人が、森林関係の仕事で村を離れて過ごした体験を持っている。若い時から村を離れ厳しい環境の中で耐える事を学び、言葉や身だしなみ、礼儀作法を身につけたものと思われる。これが今日家や地域に受けつがれているようである。

又信仰心が厚く、朝夕の礼拝が行われ、殆んど人は、読経を行い、仏事や法要なども親族一同が集り、律儀に行われている。多くの人は来世があると信じ、因果応報を思い、感謝報恩の気持がある。死に対しては、不安もあるが、すべては阿弥陀仏におまかせの気持で安定しているように思われた。

甘茶の生産は男は畑仕事、女は摘み取り、乾燥などを行い、戸外に出てみんなで談笑しながらの作業で楽しみにしている老人が多かった。

村はいまなお過疎化の傾向にある。若い人にはまだ定住するだけの仕事がなく、医療や教育、娯楽の面で定住をさまたげている。しかし明治、大正時代に生まれ育った老人にとっては、もはや物に対する欲求はおのずから限られており、今日の衣食で充分の満足を享受しており、欲求不満はあまりないようである。静かで美しい自然の中で、温かい知人、友人にかこまれて老後をすごすその事が楽しみであり生き甲斐でもあるように思われた。